

<教育相談>

学級経営に生かす教育相談活動を目指して — 構成的グループエンカウターの方法を取り入れて —

糸満市立兼城中学校教諭 高 良 貴 子

I テーマ設定の理由

近年、いじめ、不登校、非行、学業不振、集団不適応などの諸問題が、学校だけにとどまらず、社会問題としても注目を浴びている。これらの問題の要因の一つとして、子ども達の人間関係づくりが低下していることを指摘する声は大きい。急激な社会構造の変化は物質的な豊かさを生み出した一方で、価値観が多様化し、核家族化や少子化が進み、人々が触れ合う集団や場が失われつつある。

その中で、幼児期以来、人間関係の持ち方の学習不足を招き、周囲との心の結び付きが希薄になり、仲間づくりを苦手とする子どもが増加している。今日の学校教育においては、生徒心理の理解に努め、望ましい人間関係を育成する目的を持って、積極的に生徒と関わっていく教育相談活動やカウンセリング・マインドを生かした対応が求められてきている。

しかし、現実には教育相談の必要性は叫ばれていても、往々にして問題事例が起こってから対応する指導重視の活動がほとんどなのではないだろうか。また、学校現場においての教育相談の考えが、十分に浸透し運用しているかという疑問である。これまで教育相談は、専門機関の考え方や姿勢をそのまま導入してきたため、学校にそぐわない側面があり、数々の誤解や弊害を残したと考える。例えば「教育相談は時間がかかる、即効性がない、生徒を甘やかす」等のイメージが強かったり、問題行動の生徒指導のみの活用に止まったり、教育相談の重要性は認識しながらもどのように携わればよいかわからず、消極的になっている教師も少なくない。

本校においても、学期毎に「教育相談」の時間を特別に設定して取り組んでいるが、多忙な学校行事に毎回組み込むことに苦慮し、全教師での対応も非常に難しい。また、改まって制限された場面での対話では、生徒の本音までは見えにくい。学級担任などは、対話を基本とする教育相談だけに身構えてしまい、日々の忙しさの中、時間的、精神的にゆとりが見い出せない現状を深刻に悩んでいる。

このような、学級担任が行える教育相談活動には、どのようなものがあり、また、どの教師も気軽に活用できる有効な教育相談の方法はないものだろうか。

文部省の「生徒指導資料」によると、学校カウンセリングは、生徒の人間性の開発に直接働きかける役割をもつので、学級の集団生活に於いての人間関係や集団そのものの雰囲気注目するグループカウンセリングの考え方や方法を導入することが必要と説いている。すなわち、問題解決だけに止まらず、生徒一人一人の自己理解の援助や、人間関係の改善と確立のための働きかけも重要としている。

それならば、仲間づくりを苦手とする生徒が増加している昨今、学級担任は、学級内の人間関係が円滑にいくよう、交流を積極的に図る手立てを講じる必要がある。人間関係の形成は、自己表現や他者理解の上に成り立ち、人間の内面に働きかける活動なので、教育相談活動が大いに生かせるのではないかな。

そこで、学級の人間関係づくりを援助する具体的手法として、構成的グループエンカウターの技法を取り上げ、学級担任と共有し実施することで、教育相談が、学級に生かされるのではないかと考え本テーマを設定した。

<研究仮説>

生徒理解のための客観的資料を収集し、構成的グループエンカウターという技法を用いて積極的に生徒と関わっていけば、進んで人間関係を広げ深める生徒の育成につながるだろう。また、中学1年の学級における人間関係がスムーズに築かれ、内在する諸問題の予防にもつながるであろう。

II 研究内容

1 学級担任による教育相談

学級担任の役割を大きく3つ挙げると、

- ① 一人一人の生徒の自己実現の援助
- ② 仲間づくり、良い人間関係づくりの援助
- ③ 一人一人の生徒理解と評価

これらを実現のするためには、始業時と終業時の短学活をはじめ、給食、清掃、特別活動の時間、学校行事に至るまで、常時生徒と接することが大切である。それゆえ、担任は生徒にとって最も身近な存在であり、初期の教育相談を効果的に行える立場にあるといえる。

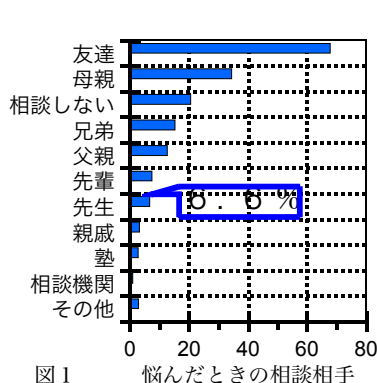


図1

悩んだときの相談相手

しかし、平成10年に沖縄県立教育センターから出された「児童生徒の生活実態と意識に関する調査」を見てみると、学校生活でかなりの生徒が勉強や成績などの悩みを持っている

にも関わらず、生徒が担任の先生を身近に感じ、相談相手として選ぶ割合が低いことが伺える。

これは、教師が常に全ての生徒の内面に接したり、個別に関わりを持ったりすることの難しい現状を、反映しているものと推測する。

(1) 担任による教育相談の限界の把握

① 指導者、評価者としての限界

生徒が相談相手として担任を選ばないのは、学校生活の中で生活指導、学習指導、進路指導など、担任が実際に指導や評価をする立場にあるため、生徒が自分の悩みを打ち明けることをためらうからである。これは、ある程度仕方のないことで、「性」「非行(万引きなど)」「いじめ」など個人に不利益になる問題を評価者である担任に相談に行くことは、生徒側からすれば大変な勇気を伴うものであろう。

② 担任の教育機能から生じる限界

学級担任は、同時に教科担任の立場でもあるため、人間関係育成機能と教科目標達成機能という二つの教育機能を持っている。この二つの機能が充足されることが大切だが、現在の学校教育の中では、教科目標達成機能が優先されやすいため、生徒側からすると、教科担任の立場が担任よりも色濃く重なって見える。その教科担任の多くは、一人の生徒にゆっくりと時間をかける余裕が、時間的にも精神的にも見い出せないため、やむなく、わからない生徒を置き去りせざるを得ない苦しい現状にあり、生徒には近寄りがたい存在となってしまう。

③ 時間の限界

カウンセラーの基本的姿勢は、共感的姿勢、受容、傾聴と常に受け身の立場をとらなければならない。しかし、教育現場は次々と行事や問題が発生し、教科担任、部活教師という重複した立場を持っているため、担任としてだけの生徒を対象にするわけにはいかない。それゆえ、時間的、精神的ゆとりが見い出せないという意見が教師側から多く出される。

④ 親に関わるときに生じる限界

生徒の悩みがすべて生徒に問題があるわけではなく、生徒の親や家庭の経済状況に問題があったり、生徒のプライバシーやプライドを大切にしなければならないと感じた場合、どこまで立ち入ってよいのかと迷う面が多々ある。

⑤ 自分の力量の限界

授業や学校の日常生活の中で問題を持つ生徒に関わる時、やむをえず他の生徒に負担をかけてしまう事態がしばしば起きると担任はやりきれなくなり、その生徒の関わりに限界を感じてしまう。

(2) 限界を感じたときの担任のあり方

学校の中で評価と無関係な人間は少ないため、養護教諭や部活動の顧問の先生などへの相談が多くなるのは当然のことである。その際、相談された人と担任教師とが、情報や資料の収集に協力し合える人間関係を築くことが必要である。また、担任は自分の力量を知ることでも大切で、一人で抱え込むのではなく、悩みの深さに応じて他の教師や養護教諭、あるいは専門機関を大いに利用し連携していくことが必要である。いずれにせよ、その連携の中心に常に位置するのが学級担任である。

(3) 教育相談を生かすために

生徒指導の一環として位置づけられる教育相談の目指すものは、全ての生徒に対しその個性の伸長を図り、自己主張ができ、しかも仲間と仲良く生活しながら自分を成長させるために援助・指導を行うことにより、よりよい社会人を育てることである。

この考えに立てば、教育相談とは単に悩みや問題を有する生徒に対し、一対一で心理療法的な方法を利用して行うものだけではない。実際の学校には健全な生徒の方が多いことから、生徒の自己理解や自己実現の援助、生徒間のよい人間関係づくりの援助、悩みや問題を持つ生徒を生み出さないような予防的かつ開発的な役割が重要である。また、担任としては、より早い対応がより効果的な予防につながるから、相談したくてもなかなかできないという生徒の現状を考えると、受け身の姿勢では何も問題解決することにはならない。そこで、カウンセリング実施までの一連の流れを「予防・発見」→「診断」→「相談実施」とまとめてみた場合、「予防」と「発見」のほとんどが担任の教育活動の範疇にあり、最も重要な位置を示すものである。

2 教育相談の具体的方法

教育相談の具体的方法には、生徒の年齢や相談内容に応じて様々なものがあり、それらについて理解を深め、活用していくことが大切である。具体的な

方法としては、次の3つを挙げることができる。

(1) 面接

① 個人面接

学校における個人面接には、自主来談による面接、呼び出し面接、定期面接、チャンス面接などの形態がある。中でも、廊下などですれ違ったときなど、ちょっとした機会をとらえ、意図的に生徒に声をかけ理解を深めるチャンス面接は、教育相談の日常化のためにも大切である。

② グループ面接

グループの醸し出す雰囲気を利用して、個人の態度や行動の望ましい変容を図り、生徒理解や人間関係の促進などに活用できる。

(2) ロールプレイング

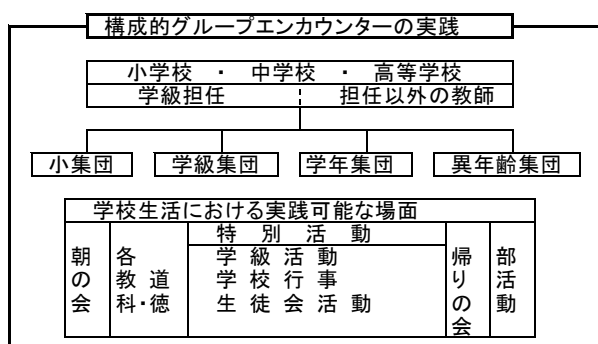
ある場面を設定し、ある役割を即興的に演ずる体験を通し、これまでの自分のあり方や相手との関係を振り返り、より自発的で創造的な自分を見いだしていく一つの方法である。

(3) 構成的グループエンカウンター

人間関係づくりの実践方法として有効である。リーダーが参加者の動きなどの主導権をとって行い、集団でエクササイズ（作業や話し合いの課題）を体験しながら、本音と本音の交流のできる人間関係を深め自己の成長が図られる。

① 構成的グループエンカウターの活動場面を図にすると次のようになる。

【構成的グループエンカウターの活動場面】



* 参照 北海道教育研究所「教育相談の考え方・生かし方」
図2

② 構成的グループエンカウターの特色

ア 多人数が同時に実践できるため、学級や学年など、様々な集団で実践できる。

イ 実践に要する時間の予測ができるため、計画的、継続的に実践できる。

ウ 教師がリーダーになって行うため、日常の教育活動における教師と生徒との関係に近い形で実践できる。

エ 対象生徒の実態に合わせエクササイズの題材や難易度を調整したり、進め方を工夫できる。

オ エクササイズが用意されていれば、必ずしもカウンセリングの専門的な研修を積んだ教師でなくとも実践可能である。

カ エクササイズがゲーム的な要素を持つため、生徒の興味を引きやすい。

キ 集中的に行えない場合は、一定の間隔をあけて行っても効果が期待できるため、教育課程に位置づけて実践できる。

ク 構成的グループエンカウンター実施後、生徒の感情や気づいたことを表現させ、他の生徒と分かち合う場面を作る。これをシェアリング（ふりかえり）という。

III 指導の実際

1 生徒の実態の把握

(1) 目的

学級の中には、目に見えない生徒間にある雰囲気が影響を与える。特に最初の出会いの場面や、学期初めの時期に、生徒同士の人間関係や集団の関わりを担任が把握していることは、一人一人の生徒理解につながり、学級の円滑な仲間づくりの援助に役立てることができる。

(2) 調査対象 糸満市立兼城中学校1学年 116名

(3) 方法

① 交友関係調査

学級集団の人間関係を測定して、学級集団の構造を知り指導に生かすため、ソシオメトリックテストの方法を参考に、交友の多い友人の選択による学級内の交友関係図（ソシオグラム）を作成した。（P.53 参照）

② 質問紙法アンケート

学級内の交友関係、学校生活、希望する学級像など生徒の意識調査をする。

③ 気になる生徒の抽出

ア ①②の情報から、気になる生徒を抽出し、担任の生徒理解、生徒観察に役立てる

イ 構成的グループエンカウンター実施の参考とする。

2 構成的グループエンカウターの実施

(1) 生徒の実態

本校は、小学校一校からの入学なので学年全員が知り合いで、初めから和やかな雰囲気である。その反面、既成グループや孤立気味の生徒の存在や個々

人のイメージがやや固定され、馴れ合いの人間関係ができています。新入生特有の新鮮さに欠け、緊張感や期待を持った生徒間の積極的な交流が不足し、これまでの固定観念や、周りからの情報によってお互いを認識している。そのため、他者に対する誤解や偏見が発生していても、それを確かめるきっかけや改善する術を彼らは持っていないように思われる。

(2) 実施のねらい

生徒の実態から、教師が、欠如した人間関係づくりの体験を意図的に補う効果は大きいと考え、構成的グループエンカウンターを実施し、新たな人間関係形成の支援を試みる。これにより、

- ① 生徒が自分自身や他者との関係に気づき、意識の向上が図られる。
- ② 生徒が自己を発揮し、生徒同士がより互いを知り合って、学級での人間関係が改善・促進する。
- ③ 学級担任と生徒の情報を交換し、エクササイズの実施や実施方法の検討会を重ね、より理解しやすい

く活用しやすい技法を目指す。

- (3) 対象生徒 糸満市立兼城中学校 1 学年
116 名（1 組 38 名，2 組 39 名，3 組 39 名）

- (4) 活動場面 特別活動（60 分，50 分）

【1 回目】学級活動（60 分）体育館 学年全体
研究者がリーダーとなり行う。

【2 回目】学級活動（50 分）教室 1 年 3 組

研究者は一学級を受け持ち、同時に他の担任も授業を行う。

(5) 実施上の留意点

- ① 単なる遊びではなく、授業であることのけじめをつける。
- ② 実態調査で得た情報を基にエクササイズを選択し、グルーピングや生徒観察に役立てる。
- ③ 構成的グループエンカウンター実施後、シェアリングを行う。この場面の設定によりレクリエーションと区別される。

(6) 展 開（構成的グループエンカウンターの進め方）

エンカウンターの進め方

◎本時の展開（1 時間目）

1 エクササイズの実施

2 導 入

本時の大まかな内容を簡単に説明！

3ウォーミングアップ

不安感を取り除き、リレーションづくりをする。エクササイズにつながる簡単な体をほぐす動作などで雰囲気を盛り上げる。

4エクササイズの実施

教師はルールが守られているかを確認しながら、グループを回って援助する。グループ作りに配慮し、ただのゲームとなつて、人との関わり方が、雑にならないようけじめをつける。

時間	学 習 内 容	生徒の活動内容	教 師 の 支 援 と 指 導 上 の 留 意 点
5 分	オリエンテーション	・先生の話を聞き、意欲を高める。	○今日の学習の目的や意義を認識させ、エクササイズの説明とふりかえり（シェアリング）について説明する。（活動） ☆エンカウンターのリーダーとなる教師が中心に話し、担任 3 人サブとしてつく。（留意点）
7 分	ウォーミングアップ『ウォーキング』	・自由気ままに、リズムにのって、歩いたり、スキップしたりして、気持ちをリラックスさせる。	○気持ちをリラックスさせるために、自由に歩いてみましょう。 ○いろいろ、指示を出しますから、そのとおりに動いてください。 ・普通のテンポで歩く・小走り・スロー ・スキップ・ストップ ○リラックスして体をほぐしてください。 周りには、だれがいるか確認して、近くの人と握手しましょう。（周囲の確認、自己の確認） ☆担任も一緒に歩きながら、雰囲気作りをする ☆仲良しグループだけで行動しないように注意する（生徒観察）
13 分	『ジャンケン列車仲間がし』	・クラスメイトを探し出し、ジャンケンをして、勝った人の肩につながっていく。 ・各クラスの生徒同志呼び合う（声を出す） ・応援し合う	○バラバラに散らばったところから、自分のクラスメイトを見つけジャンケンをします。負けた生徒は勝った生徒の後ろにつながります。手をはなさずに長い列車を作ってください。また、クラスの仲間が分かるように、お互いに声をかけ合ってください。 ☆クラスの掛け声や応援の掛け声をかけあうよう促す。（生徒観察）
17 分	『サッカージャンケン』（17 分） 前半／後半（各 5 分）	・学級の生徒を 2 チームに分け、守りのチームがポジションにつく。攻めのチームがジャンケンして勝ち抜きゴールする。	○列車ジャンケンできているグループをもとにクラスを 2 チームに分ける。 △守りのためのチームでポジションを決める ・1 番目の守り・・・9～10 人 ・2 番目の守り・・・6 人 ・3 番目の守り・・・3 人 ・ゴールキーパー・・・1 人 △攻めの場合、5 列に並んで行う 自分の前の生徒が 1 番目で負けるか、突破したら攻撃に出る。 ○生徒に模範演技をさせて説明！（事前指導）

5 シェアリング

エクササイズの後、教師は生徒と一緒に活動をふりかえる。「どう感じたか」「どんなことに気がついたか」を振り返って自己理解、他者理解を深める。

『シェアリング』
(18分)
・感想の発表
・ふりかえり用紙の記入

・感想をいろいろ発表させる。
・ふりかえり用紙に記入させる。

☆生徒の行動を観察し、ふりかえりの資料とする。
○エクササイズをしてどんなことを感じたかを軽く発表させ、ふりかえり用紙を記入させる
☆教師も気づいた点など出しながら、生徒のホッネの部分聞き出せるよう努める。

6 生徒の自己評価

ふりかえり用紙に本時全体の自己評価を記入する。その際、先だってシェアリングを行う。

7 教師のフィードバック

生徒の自己理解や相互理解を深めるために、シェアリングの補足として「ふりかえり用紙」を活用した。これは、生徒だけでなく教師にとっても、活動をフィードバックし、お互いの気づきを高めるのに効果的だと思った。また、「エンカウンター通信」を発行し、生徒の様子や感想を知らせることで、より互いを知り合えるように努めた。

(6) 実践後の考察

① 生徒の感想

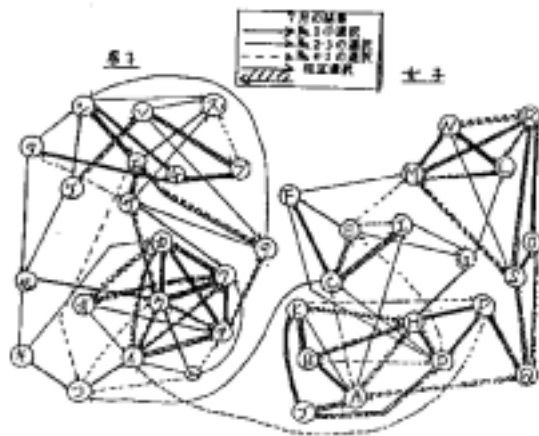
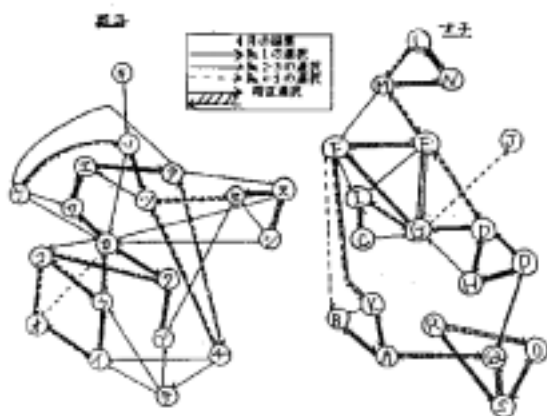
☆ふだん話さない人ともよく話せてよかった
☆こうゆう授業があっても楽しい
☆話さない人と話すとその人の性格がわかった気がした
☆いつの間にか、話したことのない人とジャンケンをしてた
☆今日はあまり声をかけられなかったけど、やはりもっと積極的になろうと思った
☆今日初めて、笑った顔を見れた人もいてよかった
☆今日は、自分の言いたいことがいえたと思った
☆気がついたら、自分に何ができるか考えていた

④ 考察 中学入学時期でクラスにできていたグループから、エクササイズを通して他の生徒と交流することになったり、まだクラスになじめず孤立ぎみであった生徒が、他の生徒と話すきっかけとなっている。また、話すことでその人の性格など情報を得られることや、笑顔で他人に接する自分に気づく生徒もいた。教師側にとっても、普段の授業や教室では見られない素顔やクラス内外の交流関係の資料が得られた。しかし、身体的接触の多い活動は思春期の中学生に、変に意識させてしまうきらいがあるので、発達段階を考慮したエクササイズの選定が必要である。また、自己、他者の理解ができ、自分の置かれている立場を再認識するので、孤立ぎみな生徒や、他の生徒から排斥されている生徒の事後指導には十分気をつけなくてはならない。



3 関連アンケート調査の結果

(1) ソシオグラム (1年A組)

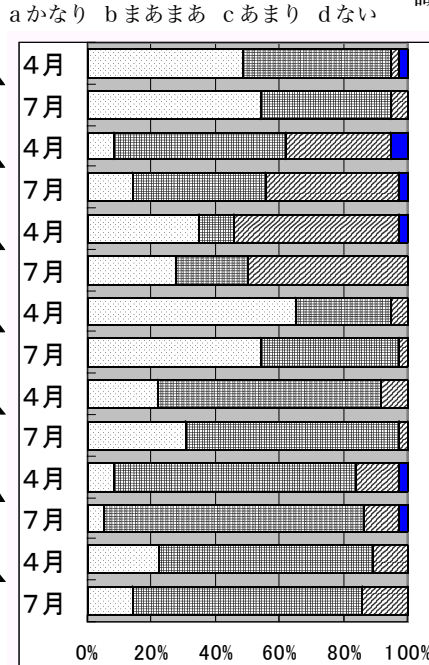


【考察】 ソシオグラムを見ると、友人関係に再編成が見られる。部活など新たな結びつきによるものもあるが、他者に対する意識変化が伺える。そして、全学級とも内在したグループ間に交流が起こり、全体的につながりができてきて、孤立ぎみの生徒を受け入れる姿勢が見られる。また、孤立ぎみの生徒が、他の生徒を認める意識変化も見てとれる。

(2) 学級意識調査

学級仲間の関係を中心に、意識調査を4月と7月に行った。

- 1 学級によく話せる友達がいる。
- 2 学級で自分の思っていることが言える。
- 3 学級に仲のよい友達以外で話せる人がいる。
- 4 あなたな友達と遊ぶことが好きですか。
- 5 友達と協力して何かをやるのが好きですか。
- 6 相手の気持ちを考えて話す行動ができる
- 7 あなたは当番活動を協力してできる。



(3) 希望する学級と評価（1年A組）

順位	希望する学級像	評価
1	明るい学級	5
2	楽しい学級	4
3	男女の仲のよい	4
3	協力的な学級	3
5	仲間はずれのない	3
6	話やすい学級	4
6	思いやりのある	3
8	のびのびしている	4
9	積極的な	3
10	まとまりがある	3
10	安心できる学級	3
12	温かい雰囲気	3
13	生き生きしている	4
13	親切的な学級	3
13	落ち着きがある	2
14	まじめな学級	3
14	清潔な学級	3
14	活発な学級	3

4月まで希望通りに達成できたかを評価させたところ、「明るい」「楽しい」「男女仲のよい」など人間関係につながる項目で、なかなかいい評価となっている。

【考察】

【考察】

学級の意識調査結果を見ると、4月より7月は「ない」の回答が全般的に減少し、0回答になった項目も過半数ある。特に2・5・6・7の項目は生徒の意識の改善や努力を要することから、生徒の自分に対する意識の高まりが伺える。また、「かなり」の回答が減少し、「まあまあ」の回答が多くなっているのも、生徒自身の基準が高められた結果と考えられる。

IV まとめと今後の課題

授業のはじめは、なぜ構成的グループエンカウンターのような授業を行うのかわからない生徒もあり、好きな者同志集まって、気楽さを好む生徒の反感もあった。しかし、実施することで、人間関係づくりを苦手とする生徒でも義務感においたてられ、話をしたり、触れあったり、普段の生活の中では積極的に行えない体験を得ることができた。また、気楽さを好んでいた生徒の中にも新たな人との出会いを知り、今後の人付き合いに積極的になろうとする意志がみられた。つまり、生徒観察、生徒理解、生徒相

<主な参考文献>

國分康孝	『エンカウンターで学級が変わる』	図書文化	1977
松原達哉編	『学校カウンセリングの組織と運営』	ぎょうせい	1998
松原達哉編	『学校カウンセリングの考え方・進め方』	教育開発研究所	1994

互理解に有効な活動であった。

ところが、教育現場では未だなじみが薄い。レクリエーションの色も濃く、シェアリングを活発なものにするにはかなりの経験がいる。生徒の実態や学校行事と関連を考慮したエクササイズの設定が必要となる。さらに、学級が人間関係の基本だが、他の学級や部活などの関係も大切で、実施には他の教師の理解や協力を得ることが重要といえる。それには、「構成的グループエンカウンター」の学校全体での研修の位置づけや年間指導計画の作成が必要であり、今後の課題となった。